

平成20年度長期社会体験研修修了報告書

研修者名 宮本 和美 (高等学校教諭)

研修先企業・部署名 サンデン株式会社 (関連会社：サンデンファシリティ株式会社ECOSグループ)

1 研修内容

- (1) 新入社員研修【4月1日～22日】(研修場所：サンデンコミュニケーションプラザ)
人材開発グループに所属し、研修運営の補佐を行った。
- (2) 工場生産実習【4月23日～5月23日】(研修場所：サンデン株式会社赤城事業所)
生産部組立課に所属し、自動販売機総組立ラインにて、表示板の貼り付け作業等を行った。
その他サブ作業として自販機の冷たい・温かいのパターン変更表示板等のコーティングフィルムはがし、インパネル準備、サンプル台作成等を行った。
- (3) サンデンファシリティ株式会社 ECOS グループで業務実習【5月26日～】
(研修場所：サンデンファシリティ株式会社サンデンフォレスト管理事務所)
 - ①工場見学・自然体験活動・環境学習の受入・案内・学習環境整備
 - ②サンデンフォレストの維持管理に関わる業務
オオムラサキの飼育と観察、天蚕の飼育と観察、ホタルの観察とホタル生息地の水温測定、スズメバチの駆除、散策道の安全確認、サンデンフォレスト内に生息する動植物の記録写真撮影 等
 - ③自主的に企画・実行した業務
サンデンフォレスト内の危険箇所及びコース案内表示板と樹木銘板の作成・設置、工場見学時の注意事項見直し
- (4) 休日等を利用した自主研修
 - 【11月7日～9日】ネイチャーゲームリーダー養成講座 (国立赤城青少年交流の家)
 - 【11月25日】「ぐんまの教育」特別講演会 演題「学びの扉をひらく～堀川の試行錯誤～」
(群馬県総合教育センター)

2 研修から学んだこと

- (1) 「あるべき姿」を考え、問題を解決する
「問題」という言葉は悪い意味として受け止められる傾向にありますが、製造業の改善活動では「現状と『あるべき姿』とのギャップ」として受け止めます。このような発想の転換が新鮮でした。現状と「あるべき姿」とのギャップを埋める行動が「問題解決」です。問題解決の過程は次の5段階となります。
 - ① 問題発見
 - ② 現状の把握と分析
 - ③ 対策の立案と実施
 - ④ 効果の確認 (対策が有効であったか否かを確認)
 - ⑤ 歯止め (問題発生を防ぐ)問題を発見するときは主体的に考えることが必要であり、問題を解決するときは主体的に動くことが必要です。毎日の業務が問題解決の繰り返しでした。それによって業務を終えた後で自らの判断や行動を振り返る習慣がつけました。
- (2) 一人の問題は全員の問題、全員の問題は一人の問題
サンデンフォレスト内の危険箇所及びコース案内表示板と樹木銘板を作成・設置するとき、自分でできる作業は自分で行いましたが、複数で作業した方が効率が良い場合は研修先の上司や同

僚が協力してくれました。このように、一人が発見した問題を全員で協力して解決する、職場全体が抱える問題を自分の問題として考えるという文化がサンデン株式会社・サンデンファシリティ株式会社双方にありました。この経験により、「一人の問題は全員の問題、全員の問題は一人の問題」という意識で周囲と協力し助け合うことの大切さを改めて学びました。

(3) 相手の理解度に配慮する

小中学校の先生方や児童生徒との交流を経て、児童生徒をよく見て関わることを学びました。

特に社会科見学受入業務では、小学1年生に接するときは小学1年生と同じ目線に立って接する、中学1年生に説明するときは中学1年生が理解できる言葉で説明する等、児童生徒の理解度に配慮しました。

今まで教えたことのない小学生や中学生と接して、教えることの難しさが身にしみました。

3 所感

(1) 学校と企業との相違点

教員としての視点と同時に会社員としての視点をもったことにより、改めて学校をこれまでとは異なる視点から見直すことができました。

学校と企業との相違点は、「変化にどう対応するか」に表れると考えます。

学校と企業とは目的も性質も異なるため一概に言えない面もありますが、社会情勢が変化した際、学校では変化に対応しながらも今までのやり方を守ろうとするのに対し、企業では今までのやり方を守ると並行して新しい試みをすることで変化を乗り越えようとする傾向があるように見受けられます。

企業に勤める人々は、常に相手の存在を念頭に置いて行動します。それゆえ、社会情勢や顧客等の変化に即して柔軟に対応し生き残ろうとします。地域や顧客、社員、株主等の信頼なくして企業は存続できないからです。これに対して学校は地域から必要とされて存在する機関なので、社会情勢や児童生徒等の変化に関わらず今までのやり方を守ることで生き残ろうとします。

しかし、現在、学校が抱える課題は多様化し、今までのやり方では対応・解決が難しい事例が多くなっています。社会情勢が変化しても目的・性質を変えない点が学校の良さではありますが、今後は学校に勤める私たちも変化に対して柔軟に対応する必要があると感じました。

(2) 自己評価と今後の目標

当初の目標であった「人間性の幅を広げ教科の専門性を高める」に「問題解決能力とコミュニケーション能力の向上」という新たな目標を加えました。問題解決能力については、自主的に企画した業務（サンデンフォレスト内の危険箇所及びコース案内表示板と樹木銘板の作成・設置、工場見学時の注意事項見直し）を行うことにより向上しました。危険箇所及びコース案内表示板は65枚、樹木銘板は51枚作成・設置しました。工場見学時の注意事項を守る理由を児童生徒に説明しました。これらの業務を行った結果、より安全に自然体験活動と工場見学を実施できました。

コミュニケーション能力についてはさまざまな人との交流により向上しましたが、相手を理解しようとする努力を続けることが必要であると感じました。

研修から学んだことを生かすため、次の2点を今後の目標とします。

- ① 問題や変化に対して主体的に対応する
- ② 相手の立場を考える

最後に、本研修においてお世話になった、群馬県教育委員会・群馬県総合教育センター・所属校・サンデン株式会社・サンデンファシリティ株式会社の皆様に感謝を申し上げます。